

## 畫界漫言

黒田清輝氏談

▲私は展覽會の審査委員たる關係上、繪に就いての巧拙を御話する事は出來んが、私の好む繪は如何なるものであるかと云ふ事を御話して見たい。

▲私の嗜好を云へば所謂展覽會向の繪——即ち技術、意匠、構圖が如何に巧妙でも展覽會向の繪は好まない、尤も畫の批評をするときは此の三點を充分見て自分の嗜好を取除いて觀察せねばならぬ。

▲それで私の好きな繪と云へば假りに例を擧げて見ると、小さな部屋の中を光線が程能く照して周圍の色彩の配合も穩かで、其中に老人が椅子に凭つて居る、此の人はさもこう云ふ心持ちで此の部屋に居るであらうと云ふ様な圖とか、亦是雨が霽れた計で空氣には濕氣が満ちて四圍あたりの風光ながめが之れに幾分か濕氣を帶んで居、而かも雨でない一刹那の光景ありさまを簡單に描いた圖などが私の好きな繪だ、が此れは決して展覽會向の繪ではない、公會の場所では論文的、演説的の繪でなくては不適當である。

▲今年の展覽會の洋畫は昨年比べて進境を示して居る。殊に今年は人物畫の多いのも研究が餘程本式になつて來た好い例である。

▲日本人は人物を充分研究しなければならぬ、畫家として形を知るには人物によつて研究する外には途がない、外國などでは初めから人物を研究する習慣があつて博物館などにある繪は甚しく不完全のものはない

▲日本は全く之れに反して居るのだから一層人物の研究をせねばならぬ。人物を研究するには裸体が第一である、着物をつけた人を描くのは裸体の充分描ける様になつた後でなければならぬ。

▲昨年より人物畫が多いのは研究が本式になつて來たと云ふものゝ日本の洋畫界が立派になつたのではない、只昨年比べてと云ふまでである。

▲展覽會が出來て展覽會向の繪は出來ると云ふ事は避け難い事だ、で只趣味も何もない人の注意を惹く事のみ目的とした繪を奨励しない様にしたいものだ。

▲斯う描けば人が喜ぶであらうとか、人が褒めるであらうとか、評判が善からうとか云ふ觀念を土臺にして描いたものは、觀る者に惡感情を懷かせる、此の種類の繪が兎角多くなり易い、外國などで既に久しい經歷を有つてゐる展覽會などに此様な結果があるのだから、日本で新しく是れからやつて行く上は賤しい精神を土臺として作つた繪のない様にしたい、是が私の希望である。

【『読売新聞』明治四二年（〇月三日）】

第二回文展（明治四二年〇月五日〜二月三日）をふまえての所感。